

前回、1877年に英国の
ネイチャー誌が、日本政府が
東京帝国大学で西欧諸国に
歩先んじた偉大な科学技術教
育を完成させた、と絶賛した
ことを紹介した。そして19
04年、ネイチャー誌は再び
日本のエンジニアリングの実
力について、次のような賛辞
を贈っている。

「日本の軍艦に見られる素
晴らしい技術は、日本のエン
ジニアリングの状況を示す好
例だ。海事については、西欧
が与えることのできるすべて
を彼らは学んだ。と同時に彼
らは、自分たち独自のものを
作ったのだ。英国の技術は日
本人によって改良され、彼ら
が造った船は多くの面で世界
の称賛を浴びている」

これは、半年後の日露戦争
における日本海海戦での完勝
を見通すかのような評価だ。
そして、こう続けている。

「日本の技術者や科学者に
よる発明・改良を見れば、し
ばしばいわれる。日本人には
独創性がない」という批判が
まったく当たっていないこと
がわかる。純粹科学でも、日
本人研究者は知の開拓者とし
ての地位を確立している。日
本人教師や学生の発表は、ほ
かの先進国と比べて遜色ない

平成 28 年
7 月 8 日

科学立国の未来 若いお雇い英国人に託す

ものである。日本にはまだニ
ュートン、ダーウィン、ケル
ヴィンは出ていないが、日本
の大学には、世界のどこに出
しても恥ずかしくない人たちが
いる」

ここにも素晴らしい観察力
が発揮されている。振り返れ
ば、産業界に力を入れた明
治政府は工部省を置き、早く
も明治4年(1871年)に
高級技術者の養成機関として
工部大学校(当初は工学寮)
を設立した。それを指導した
のが、ネイチャーの記事を書
いたヘンリー・タイヤーだ。
政府高官を上回る年俸を出し
て招いた、いわゆるお雇い外
国人の一人だ。

1873年に来日した彼
は、英国の科学技術教育の立
ち遅れを嘆いており、ヨーロ
ッパ大陸の工科大学、とくに
スイスの連邦工科大学におけ
る体系的・組織的な工学教育
に関心をもっていたので、そ
の夢を工部大学校で実現しよ
うと努めたのだ。

それを成し遂げた彼はもち
ろん偉い。同時に、国のエン
ジニアリングの将来を25歳の
若者に託した明治政府の見識
に、万雷の拍手を送りたい。

(東京大学名誉教授
和田昭允)

和田昭允

明治維新による日本の近代
化は、人類文明の歴史の中で
も特筆すべき一大イベント
だ。その動きを先導したいわ
ゆる維新の三傑について徳富
蘇峰は言う。「非常の場合に
於て、非常の難に当るには、
西郷其の人あり、国家の秩序
を定め、統制の周到に就ては、
大久保其の人あり、然も国家
の大計大略を定め向ふ所を指
示したるは、木戸其の人であ
る」(「三代人物史」読売新
聞社)

明治維新を起した桂小五
郎は、明治新政府にあつて木
戸孝允(きと・たかよし)と
改名し、その完成を目指す。
彼はその世界を広く見る開明
性と高い政治的識見を買われ、
ただひとり総裁局顧問専
任となった。

政治の裏面的最終決定責任
者として、外国事務掛・参与
・参議・文部卿などを兼務し
ていく。文部卿には、教育は
国家の最重要課題と考えた木
戸が自分から望んで就任。女
子教育の必要性をいち早く洞
察し、東京女子師範学校(現
在のお茶の水女子大学)を明
治8年(1875年)に創立
した。



木戸孝允 (和田昭允氏提供)

平成 28 年
7 月 14 日

明治維新の木戸孝允 開明性・精神力で日本近代化

「五箇条の御誓文」の作成
を主導し、第一条の「列侯会
議ヲ興シ」を「廣ク會議ヲ興
シ」に改め、第四条「舊來ノ
陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基ク
ヘシ」を加えた。第五条には
「智識ヲ世界ニ求メ」と、明
治維新の世界的視野を示す。
また軍人の閣僚への登用禁
止、民主的的地方警察、民主的
裁判制度など、極めて現代的
・開明的な建言を行った。

木戸の努力により、薩長土
肥四藩の藩主連署による版籍
奉還の上表が提出された。「知
藩事は世襲とする」とあった
のを、木戸は「世襲」を削除
し、政府による任命制として
廃藩置県の詔勅が下った。「廣
ク會議ヲ興シ」の精神から木
戸は、国会の衆議院に相当す
る「地方官會議」(1875
年6月20日〜7月17日)の第
1回を、自らが議長となつて
開催する。

この木戸を、明治4年(1
871年)に日本に来たオ
ーストリアの外交官ド・ヒュ
ネル男爵が「これほど強烈に
精神力を感じさせる風貌に
精神の力を感じさせる風貌
に、私はこの国でかつて出会
ったことがない。彼がものを
いうとき、その表情は独特な
生氣をみなぎらせる」と書い
ている。木戸の近代日本建設
には、この強烈な人間精神に
対する多くの人々の共鳴と信
頼があったに違いない。

(東京大学名誉教授
和田昭允)

和田昭允

今日の科学技術ニッポンの
起点は明治政府の工部省の設
置と、それによる工部大学校
の設立にある。これを推進し
たのが日本の工学の父といわ
れる山尾庸三(やまお・よう
ぞう)だ。

幕末から明治初期にかけて
の混乱の真ただ中にありな
がら、政治から一步はなれて
日本のはるか遠い将来を見通
し、その近代化を願って果敢
な行動を起こした人たちがい
た。1863年、26歳の山尾
は伊藤博文、井上馨ら5人の
長州藩士のひとりとして英ロ
ンドンに密航した。

当時はまだ開国前の鎖国時
代だ。密出国者に対しては吉
田松陰の例にも見られるよう
に、江戸幕府が死罪をもって
臨んでおり、命がけの留学だ
った。

山尾は滞在5年の間にグラ
スゴウ大学で造船学を習得。
帰国後は新政府に加わり、近
代国家の基礎は科学技術にあ
り、その発展には人材の育成
こそが急務だとの確信に基づ
いて工部省を設置した。

そして留学で築いた人脈を
生かし、ヘンリー・タイヤー
をはじめとする多くの外国人
教師を招き、工部大学校(現
在の東京大学工学部)を設立

平成 28 年
7 月 26 日

日本工学の父・山尾庸三 近代化願い人材育成

した。工業のないわが国で工
学者を育てても意味がないと
する反対論を、「工業がなく
ても、人を作ればその人達が
工業を見いだす」という正論
で押し切った逸話が有名だ。

なお、明治4年(1871
年)に山尾は、かねて温めて
いた旨唾(もうあ)学校設立
の建白書を、明治維新後の最
高官庁・太政官に提出した。
それを見ると、彼が国家利益
とは離れて、知識や技術の習
得によって人々がより幸福な
人生を送ることができるとい
う、教育の持つヒューマニズ
ムの意味をよく理解していた
ことが分かる。

上野の美術学校(現在の東
京芸術大学)も工部卿(大臣)
としての彼の努力によって設
立された。1882年に日本
工学会の初代会長となり、亡
くなるまでの35年間、その職
にあり、日本の自覚ましい近
代化を見守った。

英国では、日本の発展の礎
を築いた5人を長州ファイブ
(五傑)と呼び、功績をたた
える顕彰碑が彼らが学んだロ
ンドン大学に建立されている。
東京の英国大使館のロビー
にも写真が飾られている。

(東京大学名誉教授
和田昭允)

和田昭允